
マリーナ

イナリズーシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリーナ

【Nコード】

N4598M

【作者名】

イナリズーシ

【あらすじ】

未完成で書きながら修正していく予定というメンドクサイ感じのファンタジー。

死痛苦

死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死死死死死死死死
亡死死死死悲シシシ夜死死血死死
燃死死死死シシシッ死死死死死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

< > < > < >

暗い部屋で何かと会話している風な少年は一人机に向かって上記の文章を紙に書いた。

ある日、いじめっ子6人が、少年が持っていた紙切れ（さっきの文章）を奪い取り回し見る。

その直後、いじめっ子の一人が首を血が出るまでかきむしり絶叫しながら死んだ。

その隙に紙切れを取り返し、
そして笑みを浮かべる少年

その日を境に、いじめっ子達が一人、また一人と死んでいく。

「呪いの力だよ」

少年は、死んだ子の葬式の間にて、いじめっ子の人の一人に宣告する。

「次は誰の番かな？」

いじめっ子の一人は恐怖して、残された3人と相談する。

3人は少年に助けを求めた。

だが、聞き入れて貰えない。

「僕を虐めた罰だ。死んで罪を償え」

翌日、また一人が死んだ。

残り2人は、周りの大人達に相談した。
だが、半信半疑で信用してもらえない。
それよりも人を虐めた事を叱られる。

友人たちのいくつかは、それを聞き怖くなり、少年に近寄らなくなる。

先生も気味が悪くて目を合わせない。

少年が話しかけても避ける。

（その日の放課後）

苛めっ子の一人が死ぬ事を恐怖して包丁を取り出し少年を殺すと脅した。

「別にいいよ。僕が死ねばこの呪いは無敵になる」
少年はそう言いつて相手にせず立ち去る。

その夜にて、少年は深夜の教室の黒板に向かう。

（翌日）

死の時間が迫る事に恐怖してた苛めっ子は、授業中も落ち着かず包丁を机の中に隠し少年を殺そうか葛藤している。

だが、人前で殺せる筈も無く

少年を殺すために、学校帰りのを少年の自宅付近で待ち伏せしていた。

が、もう一人の苛めっ子が少年宅を訪問しに来て少年を刺し殺した。生き残った最後の苛めっ子は、その場を逃げる様に自宅へと帰る。

深夜、少年を刺し殺した友達がどうなったのか、電話で確認してみ

ると、親御さん泣き状態。死んだらしい。

（翌朝）

彼は恐怖していた。少年を殺しても無意味。寧ろのろいを掛けた本人が死ぬからこそ呪いを解除できない。

最後に死ぬのは自分と、完全に絶望したまま、布団の中に潜り込んで怯えている。

（その同時刻学校にて）

登校してくる一人の少年。

黒板に壁に書かれた字列（冒頭の文字列）を見つける。

僕の親友が死んだ。

親友だけじゃない。

11日間で、この学校で11人が死んだ。

警察の調べでは死因は原因不明の呼吸困難であり自然死という事になっっているが、

虐められていた子の呪いだというのを誰もが確信していた。

死に際に彼はクラスの黒板に書き記したその文字は、当然自分も見ってしまったいて、この先死ぬのかも知れない。

凡そ30人が見ていて、どういう順番でし死ぬのか判らないが・・・

警察もその事は理解してて呪いを信じ始めているのだが、対処のしようが無かった。

この情報は話題を呼び沢山のマスコミに報道される中で、その根本

となった少年の自宅を取陣が訪問した。

父母は居なく祖母に一人に育てられていて、少年の部屋は悪魔崇拝のマニアの様な部屋だった。

そこで少年が書いたとされる文章を見つけた。

その日、テレビ越しにその文章を見ていた人間が死んだ。

反面、僕らの学年から一人も死人は出なかった。

この事から呪いで死ぬ確率はランダムだと仮定されたと共にモニタ
ー越しでも死ぬのだと判った。

後に世界はパニックを起した。

呪いの存在を認めないといけなくなった世界

とともに興味本位で見ってしまう者が増加。

日本人の半分以上がこの呪いに掛かってしまった。

〈上記の話題をテレビで見ている男編〉

「なんだ。居たのかルーテス」

テレビを見ている一人の男が誰も居ない方向へ語りかけた。
しかし、誰かいた。

人じゃなくて異型の何か。神々しい女神っぽい。

「なんだよ。いちやイケナイのかよ。」

「いや別に・・・」

テレビを凝視する男

「やっぱり、これってネストの仕業なのかな」

「そうだな。この不自然はネストそのものだな
「どういうものなのだ？」

「詳しくは直接ネストに触れて見ないと判らないけど、次元そのものに条件を定義付けるタイプのだから優にも適用されるよ。気を付けて。」

「そうか・・・じゃあ宿主はもう既に死んでいるという事か？」

「そうだなね。この条件付けは既にこの次元にて定着されたね。」

「じゃあ、もう手遅れという事になるのか？」

「どんなネストかを詳しく調べてみない事には・・・」

「いけるか？」

「勿論」

男はテレビから離れ、トレーニングルームへ行き、バーベルを上げ始めた。

マリーナとは契約者

契約された人間は特殊な力で支援される
強い力を得るには代償が必要

宇宙から飛び出して超時空空間の波にアクセスするマリーナ
「終わった」

マリーナは呟いて地球に帰還する。

「お待たせ。判ったよ」

「どんな感じだ」

「やっぱり原因となったマリーナがこの次元に居ない以上、僕らに
手のうちようがないよ。」

「そっか、じゃあ、ちよっと遊んでくる」

「ちよと・・・このところ働き過ぎにんだからさ、体休めんと・・・
遊びにちゃ駄目」「俺がお前の事を聞くと思つのか?」

男は屋敷を飛び出してフェラーリに乗り込む。

それを上からマリーナが溜息をついている。

高速にのり横浜をぶつとばす。

「一体何が楽しいのかね」

テレパシーみたいに心に語りかける。

200kmで追い抜きまくり。

「こらスピード落とせ!」

それに従う。

「はい。居ないよ。」

300km加速する。

（その先にて）

運転手が突然、死痛苦の症状で、急ブレーキをかける。
高速の真ん中で止まる。

「あつ車が一台と止まってる。」
マリーナが気づいて知らせる

男が楽しんでる最中

止まっている車を発見

脇に止め中を確認。

死痛苦で苦しんでいる。

救急連絡、三角置いたり、ランプつけて、発煙。いろいろして待つ。

「なあ、噂には聞いてたけど酷い苦しみようだな・・・なんとかならないの？」

「無理ね。宿主の死を代償にネストされたら、それを消すにも死を代償としないといけない。しかも願う死でなく不本意な死でなければならぬ。

「その不本意な死の意味がよくわからん。

「例えるなら・・・そうね。愛してて尚且つ愛されていると思ってた相手に裏切られて殺されるとか、いわゆる死して後悔するみたいな・・・しかも、その展開を契約者本人が期待していると機能しない」

「難しそうだな。」

「そうね。貴方の場合は人を愛される事そのもの無理でしょうから。

「真顔で言うな・・・」

「一応契約しとく？」

「いいよ。俺は・・・」

番外編 マリーナ関係なし（前書き）

前回の話でマリーナが登場しない場合で尚且つ死痛苦と本筋が少し
違うもの

番外偏 マリーナ関係なし

暗い部屋で何かと会話している風な少年は一人机に向かって上記の文章を紙に書いた。

ある日、いじめっ子6人が、少年が持っていた紙切れ（さっきの文章）を奪い取り回し見る。

その直後、いじめっ子の一人が首を血が出るまでかきむしり絶叫しながら死んだ。

その隙に紙切れを取り返し、そして笑みを浮かべる少年

その日を境に、いじめっ子達が一人、また一人と死んでいく。

「呪いの力だよ」

少年は、死んだ子の葬式の間にて、いじめっ子の人の一人に宣告する。

「次は誰の番かな？」

いじめっ子の一人は恐怖して、残された3人と相談する。

3人は少年に助けを求めた。だが、聞き入れて貰えない。

「僕を虐めた罰だ。死んで罪を償え」

翌日、また一人が死んだ。

残り2人は、周りの大人達に相談した。

だが、半信半疑で信用してもらえない。
それよりも人を虐めた事を叱られる。

友人たちのいくつかは、それを聞き怖くなり、少年に近寄らなくなる。

先生も気味が悪くて目を合わせない。

少年が話しかけても避ける。

～その日の放課後～

苛めっ子の一人が死ぬ事を恐怖して包丁を取り出し少年を
殺すと脅した。

「別にいいよ。僕が死ねばこの呪いは無敵になる」
少年はそう言いって相手にせず立ち去る。

その夜にて、少年は深夜の教室の黒板に向かう。

～翌日～

死の時間が迫る事に恐怖してた苛めっ子は、授業中も落ち着かず
包丁を机の中に隠し少年を殺そうか葛藤している。
だが、人前で殺せる筈も無く

少年を殺すために、学校帰りのを少年の自宅付近で待ち伏せして
いた。

が、もう一人の苛めっ子が少年宅を訪問しに来て少年を刺し殺した。

生き残った最後の苛めっ子は、その場を逃げる様に自宅へと帰る。

深夜、少年を刺し殺した友達がどうなったのか、電話で確認してみると、親御さん泣き状態。死んだらしい。

（翌朝）

彼は恐怖していた。少年を殺しても無意味。寧ろのろいを掛けた本人が死ぬからこそ呪いを解除できない。

最後に死ぬのは自分と、完全に絶望したまま、布団の中に潜り込んで怯えている。

（その同時刻学校にて）

登校してくる一人の少年。

黒板に壁に書かれた字列（冒頭の文字列）を見つける。

その後、もう一人の少女が、それを見る。

「日直、黒板消しとけよ」

書かれた文字は少年に消される。

消される前に何気なく携帯で写真を撮る少女
後に少女はネット上の日記サイトに掲載した。

そしてその読者が一人、その日に死んだ。

ある日、ネットで『死痛苦』という名の噂が広まっていた。

以下の文字列を見たら、当日中に死んでしまうという噂だ。

死死死死死死死死死死死死死死死死死死死
苦痛死死死死死死死死死死死死死死死死死死
亡死死死死悲シシシ夜死死死死血死死刺死
燃死死死死シシシッ死死死死シ死死死

血が流れてめぐる。

クルクル回る。

心臓がなる。

のどの音。

脳が溶けて。

呼吸の音がリズムを崩す。

目が動く。

足が動く。

手が走る。

リズムが終わる。

消えていく。

柔らかなメロディーは音を変え、激しく燃えて
静かに終えた。

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3 1 3

彼岸花に口づけを。

黒赤のバラに思いを乗せる。

文字配列を見るだけで死に、プリントアウトしたり手書きした物でも見れば死んでまうという噂だ。

一日に死ぬ人間は一人までと定められていて、死ぬ順番は文字を見た人間の中からランダムに選ばれるらしい。死ぬ時は酷い死に方をするらしい。

ベテラン統計調査因が今年度の全国の死因統計をデータベース化して役所に報告しようとしている。その際、原因不明の呼吸困難死が、前年比50倍の死亡率+に変化をているのに気づいた。

明らかに確率的におかしく自然現象から乖離しているのに驚く。色々推理してみたけど、どうにも理解できないとそこへ、神様登場。

「コレ カミサマ ノ シワザ ダネ」
職員ビツクリたまげた

神々しく光を放つ物体に声が出ない。

「あ、脅かしてごめん。僕、君の守護霊だよ。」
逃げる男

「逃げても無駄だよ。守護霊だから、君から離れられないの。逃げる男は逃げるにげる。疲れ果てた所で

「ぎゃーーーーー！ まだ居るーー！！」
気絶

目覚める職員

「あ、気が付いたね。」

「ああ、まだ見えるよ」
怯える。

「あ！ これ夢かー！」

切り替えの早いプラス思考の職員さんです。

「まあ、いいや。とにかく聞いて、大介くん」

「はいはい。」

全然話を聞いてません。

職員は守護霊さんを通り抜けフープして遊んでいます。

時は流れ

疲れる職員さんです。

ぜえぜえしてます。

「あれ？ 夢なのに疲れている？」

「だから、夢じゃないって！」怒る

お茶を入れる。

「あ、僕飲めません」

着席

「つまり、貴方は守護霊さんで私の守る幽霊ですか？」

「はいそうです。いつも影ながら頑張ってます」

「具体的には？」

「具体的ですか？」

「はい」
「具体的には・・・道の曲がり門で車が出そうになったら『あぶないよー!』と叫んだり、夜遅く起きてたら『早く寝なさいー!』とか叱ったり・・・そんな感じですよ。」「
「そんな声きいたことありませんけど」
「ですね。私も通じてるのか良く判りません。」

沈黙

「で、なんでわざわざ姿を現したのですか？」
「で、私にどうしろと？」
「いえ、何もしなくて良いのです。しても無意味なのです」
「へ？」
「いろいろと面倒な事を背負い込むことになるのですよ。この情報が公にならなければ世間は何事も無く過ぎ去ります。一日一人が死ぬ程度では世の中的には大事では無いのです。1000人が死に1000人が生まれる様な世界ですから・・・無駄に不安を煽るメリツトはばにもないのです。それにこれは神がこの世界に定めたルールだから上級神様しか解除でき無いのですよ。だから、何もしないでリラックスを・・・」

ナレーション「それからというものの彼（霊）と私の共同生活が始まった。」

霊は凄く便利。5m以内の範囲内で博打とか相手の手が読めて必ず勝てる
億万長者になっていくが、金が増えると家族が豪遊し始め自分が要らなくなる。

ママは慰謝料がどうのこうので取っていく。

豪遊して女遊びするが物足りない。

ある日、盲目の女と出会い、世俗にまみれた自分を恥じて不要な金を寄付する。

金をもっと寄付しようとして守護霊を使っているとギャンブル業界から締め出しを食らう。

仕方なく彼は自営業を始めるが上手くいかず借金増える。

幽霊と喧嘩するがどうにもならず彼はついに自殺決意する。

すると死神が現れて残り生きるはずだった命を買いいたいと言い出し
てくる。

買われた命は余命が少ない者へと還元されていく仕組みだそうだ。

具体的には契約が成立すると自殺者と余命が少ない者との魂が交換
される仕組み。

そこで彼が残り生きるはずだった命は、実は長生きすると知る。

その後、彼は思いつく。死神の現象を利用し仕事を手伝う事で余命
の短い者から金銭的報酬を得て自殺者とを仲介するマッチングビジ
ネスする。そこで成功する。

おしまい。

番外編 マリーナ関係なし（後書き）

>」で、なんでわざわざ姿を現したのですか？」

「こちら辺が辻褄があってない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4598m/>

マリーナ

2010年10月9日13時28分発行